

ぼちぼちいなか

占領下の日本（三）

一億総懺悔で曖昧化

伴友貴

大蔵省の指導で日本勧業銀行が開業資金を貸し付ける

性的慰安施設の開業資金は、内務省から大蔵省に話が行き、日本勧業銀行が業者の振り出す手形を割り引くという流れで提供された。担保もろくに取らず、手形を割り引くといっても形式だけのもので、くれてやるのに等しかった。いま総会屋との癒着が大きな問題となっている第一勧業銀行の前身である。この頃から、胡散臭い話とつながりのある銀行である。

日本勧業銀行は、明治二十九年（二八九六年）に制定された日本勧業銀行法に基づいて、翌明治三十年（二八九七年）に長期資金供給の専門金融機関として開業した特殊銀行である。戦後の昭和二十三年（一九四八年）にGHQが特殊銀行廃止の方針を打ち出したため、昭和二十五年（一九五〇年）に普通銀行に転換し、さらに一九七一年、第一銀行と合併して第一勧業銀行となり、現在に至る。

大蔵省の中心人物は後に首相になった池田勇人で、主税局長だった。業界代表者と会ったとき、開口一番「金はいくらぐらいかかる？」と単刀直入に聞いてきて、それで「二百万円もあれば……」としどろもどろになって答えたところ、「なにたった二百万円かね。たとえ一億円かかって、それで大和撫子の純血が守られれば、安いもんだ」と無造作に言った。当時の物価水準からすれば、今はその千倍ぐらいにはなる金額である。最終的に五千万円（今に換算すれば五百億円ぐらい）を限度に、貸付が行われることになった。

特殊慰安施設協会（RAA）——後に、なんと国際親善協会という偽善的な名称に変更される——の設立宣言式は第二次世界大戦の「終戦の日」、昭和二十年八月十五日のわずか二週間後、玉音放送から二週間も経っていない、昭和二十年八月二十

八日、皇居前広場で役人も出席して行われた。しかも、その時には、もう第一号店が営業を開始していた。ベッドは国立病院から運び込まれ、商店から姿を消して美しい化粧クリームもドラム缶で運び込まれ、官民一体となって、八月二十七日には、第一号店が大井で営業を開始した。

吉原、千住、玉ノ井などから娼妓（しょうぎ）（売春婦）が集められた。疎開していた者は地元警察を通じて帰京を促された。さらに新聞広告や大きな看板などを通じて女性の募集が大々的に行われた。

●新日本女性に告ぐ。戦後処理の国家的緊急施設の一端として進駐軍慰安の大事業に参加する新日本女性の率先協力を求む

●女事務員募集。年齢十八歳以上二十五歳まで。宿舍・被服・食糧など全部支給

●衣食住高給支給 前借りにも応ず 地方よりの応募者には旅費支給

こうした広告で人を集めた。東京では千人の募集に対して四千人も集まるといふほど応募者が殺到した。「食うためには何でもする」という厳しい時代であった。仕事の身を慰安婦（いあんぷ）だと告げられるとほとんどが躊躇（ちゆうちゆう）したけれど、それで立ち去る女性もほとんどいなかったのが実態だった。「国のために」という文句も、彼女らが自分自身を納得させるのにかなり役だったようだという。



昭和二十年十月には、東京だけで、立川、福生、調布、三田など十カ所で営業が行われていた。東京以外でも相次いで特殊慰安施設が設けられた。第一号店の開店は、横浜九月三日、京都九月十一日、そして大阪では九月十八日であった。

各店とも盛況をきわめた。若い、性に飢え、慰安に飢え、しかも戦時特別給与で懐^{ふところ}が暖かかったから、激戦地から集結してくる連合軍の将兵は、湯水のように乱費したという。そうなることは想像に難くはなかった。儲^{もつ}かるなら何でもやる——日頃唱えている主義主張など、すぐに変えて儲^{もつ}け話には飛びつく。そういうたぐいの人物はいつの時代にもいる。その後「人類みな兄弟」などといい、道徳の大切さをもっともらしく説いた右翼の大物、笹川良一もそうだった。

笹川は、昭和六年に国粋大衆党を結成し、飛行機二十数機を陸軍に献納するなど積極的に軍に協力していた。笹川も、小佐野や児玉のように軍需物資の放出の恩恵にあずかったのではないだろうか。笹川は資本百数十万円を投じて特殊慰安施設を作った。大阪で店開きした特殊慰安施設の第一号店、アメリカン倶楽部は、笹川が作って右翼団体の国粋同盟に運営させたものだという。

十二月、笹川はA級戦犯として巣鴨に拘束された。しかし、獄中では、児玉と同じように検察に積極的に協力し、出獄後に備えたという。出獄後、競艇を始め、その胴元におさまり、豊富な寺銭をバックに政界や右翼の黒幕として権勢を誇ったことは記憶に新しい。小佐野、児玉、笹川——共通するものがたくさんあるように見える。

日本の公娼制度はデモクラシーの理想に違反する

もつとも、日本政府が肩入れし、大急ぎで作らせた特殊慰安施設に対するアメリカの反応は必ずしも芳しくはなかった。多くの将兵で盛況をきわめたというけれど、ダンスホール止まりで、まったく利用しない将兵もたくさんいたという。選りすぐりを用意した日本側のもてなしに、「据^{すえ}え膳^{ぜん}」を食わない人たちもたくさんいたという。

日本勧業銀行の手形割引という形での業者に対する貸し出しはGHQの監査に引っ掛かって中止させられてしまった。担保も不確かな、こない加減な貸し出しは認められないという指摘だった。それに対して大蔵省などが「ごもつともであるが、実はこれはあなた方の将兵を慰安するという特殊目的から、例外的扱いとして貸し付けているのだ」と弁解したところ、「その配慮はまったく無用。今後は一切

このような特別貸付けは停止すべきである」と逆に厳しく叱責された。昭和二十一年一月十日付けの三百万円の貸し出しが最期であった。実際に貸し出された金額は五千万円の枠に対して三千三百万円に止まったという。

この日本勧業銀行の監査の日付は定かではないが、最期の貸し出しの日付から判断すれば、昭和二十一年一月のことではないだろうか。それが一つのきつかけとなつて、昭和二十一年一月二十一日にGHQから「公娼制度廃止に関する覚書」が出されたのではないだろうか。米国の婦人団体からも圧力があつたらしいという。

覚書は「日本の公娼制度はデモクラシーの理想に違反するから、日本政府は直ちに従来公娼を許容した一切の法律及び法令を廃棄して、その諸法律の下に売春を業務に契約した一切を破棄せしめよ」というもので、マッカーサー元帥代理のアレン中佐から日本政府に渡された。日本政府はその指令に基づいて、昭和二十一年二月二十日までに「娼妓取締規則」および関連規則を廃止した。

形式上、これで日本からは公娼が消えたことになった。でも、本当に利いたのは、昭和二十一年三月十日、GHQが占領軍の将兵に特殊慰安施設の利用を

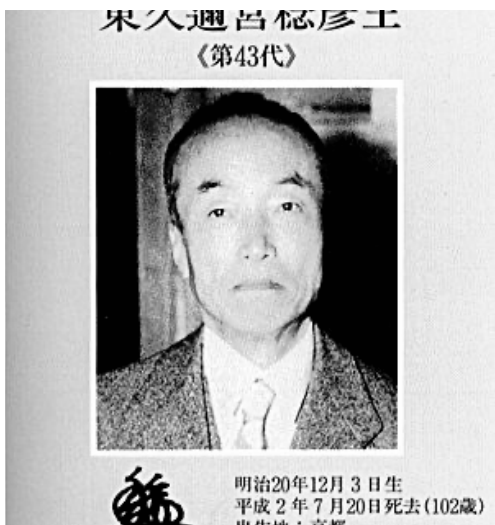


禁止したことであった。性病が蔓延したためであった。全施設にV P（梅毒地帯）と付記された「オフ・リミット」の黄色い看板が掲げられた。

時の政府は「一億総懺悔」を繰り返す

こんなメチャクチャをやりながら、当時の東久邇宮稔彦王首相は口を開けば「一億総懺悔」を繰り返していた。「みんなでいっしょにやったことだけど、みんな間違っていた。だからみんな悔い改めよう。済んでしまったことなのだから、誰が悪かったとか、何が悪かったなどと細かいことをつべこべ言うことはやめよう。同じ日本人なのだから、力を合わせて、これから頑張ろう」

こういうニュアンスである。しかも、何度も言うけれども、その内閣には児玉誉士夫のような人物も入っていたにもかかわらずである。こんなわけのわからない呪文のようなことを唱えて、いい影響を与えないはずはない。



この際は軍官民、国民全体が徹底的に反省し懺悔しなければならぬと思ふ。全国民総懺悔することが、我が国再建第一歩で、わが国内団結の第一歩であると信ずる（昭和二十年八月二十八日の記者会見 「朝日新聞」同年八月三十日）

我々がいたずらに過去に遡って、誰を責め、何を咎むることもないのでありますが、前線も銃後も軍も官も民も国民ことごとく静かに反省する所がなければなりません。我々は今こそ総懺悔をして神の前に一切の邪心を洗い浄め（中略）帝国将来の進運を開くべきであると思います。（昭和二十年九月五日 施政方針演説）

「戦争責任を問うものでもなければ、敗戦責任を問うものでもなかった。国民全体に懺悔を求めななかで、かえって軍指導部などの一部の強行論者により招かれたことで、迷惑を被ったのは国民だ——こういう被害者意識だけを強める結果となってしまった。「国民は『なぜ負けたのか』という敗戦責任はもちろんのこと、『なぜ戦争を止めることができなかったのか』という戦争責任についても、これを自分の問題として考えようとする態度に欠けていた」

こういう批判が出て、やむを得ないであろう。（「一億総懺悔論の波紋」川島高峰・早稲田大学非常勤講師）

GHQの民主化指令にも対応できず、十月には早くも総辞職に追い込まれてしまった。二ヶ月あまりの短い命の内閣であった。東久邇宮に、多くを期待すること自体が、もともと無理な話であった。東条英機内閣潰しに奔走し、ポツダム宣言を受諾し、これからは国体護持（天皇制擁護）を絶対の課題にしなければならぬとする近衛文麿を中心とする宮廷グループなどの日本の支配層により担ぎ出された人物である。陸軍大将だったから陸軍を統制できるであろう、皇室だからその権威を利用して国民の動揺も抑えることができるだろう——そういう狙いで生まれた傀儡の終戦処理内閣だったからである。

「総懺悔をして神の前に一切の邪心を洗い清め……」などと訴えるだけで、有能な人材を見分ける術にも、有能な人材を登用する器量にも欠けていたという。皇族として担がれてきた者の限界であろう。その後、皇族の身分を失ってから、新興宗教「ひがしくに教」を興し、その教祖として終わる運命が垣間見られるような気がする。東久邇宮は、所詮、政争の道具として使われた被害者なのだろう。

東久邇宮を担ぎ出し、操った、近衛文麿も考えてみれば哀れである。学習院初等科・中等科から第一高等学校へて京都帝国大学法科大学を卒業。貴族院議長、枢密院議長、そして首相と華々しい経歴を持つ宮廷政治家であった。華族界のホープであった。昭和二十年二月、いわゆる近衛上奏文を皇に奉呈したのも、その背景からだろう。敗戦は避けられない、でも敗戦より恐ろしいのは共産革命で、国体護持（天

皇制擁護^{ようご}）を絶対の課題にしなればならないと主張し、その延長線上で東久邇内閣を作り、その副総理格の国务大臣におさまったところまでは良かった。でも、状況は彼の思惑を許さなかった。

若いころ、マルクス経済学者、河上肇^{かわかみはじめ}（一八七九～一九四六）の教えを受け、イギリスの作家オスカー・ワイルド（一八五四～一九〇〇）の『社会主義下の人間の魂』を翻訳・発表し、発売禁止処分を受けた経歴のある人物も、結局は、華族界のホープにして老獪^{ろうかい}な宮廷政治家という域からは出られなかったのだろう。だいたい、そうでなければ占領軍専用の慰安施設などという発想が生まれてくるわけがない。近衛文麿（一八五四～一九四五）は戦犯に指名され、昭和二十年十二月十六日、服毒自殺した。彼が総辞職に追い込んだ東条英機（一八八四～一九四八）も昭和二十三年十二月、戦犯として処刑されてしまった。



そして残ったのは、激しい内部での権力闘争の狭間で、風見鶏^{かぜみどり}よろしく振る舞ったような人たちである。A級戦犯に指名されて巣鴨に拘束されると、すぐに恭順^{きょうじゆん}の意を示して出獄に備え、その後、政財界で活躍した人たちが少なくない。それを見ると、近衛に対しても複雑な気持ちを感じ得ない。

それと、降伏条件を聞きに行くという気の重い任務も潔く引き受け、戻ってき
ては、近衛の占領軍兵士の慰安という提案に対して、閣議でただ一人反対の意見を述べた陸軍参謀次長の河辺虎四郎（一八九〇～一九六〇）陸軍中将である。一連の資料を
読んでいて、ただ一人、清々しく感じられた人物である。どのような人物であった
のか、もっと知りたくなった。折を見て資料を探してみたいと思う。

（一九九八年春）